

概念工学と自律の問題

鈴木 貴之 (Takayuki Suzuki)

東京大学大学院総合文化研究科

概念工学には、理論的関心にもとづくものと社会的関心にもとづくものがある。社会的関心にもとづく概念工学においては、われわれが日常的に用いているある概念には何らかの倫理的・社会的問題があるという理由から、その概念の改訂や置換が目指される。しかし、人々が用いる概念を変えるということは、人々の思考に介入するという点でもあるため、その倫理的妥当性を検討する必要がある。

社会的関心にもとづく概念工学の目的が、外部からの介入によってわれわれの意思決定や行動を好ましいものに変えることだとすれば、この種の概念工学は、行動経済学で論じられるナッジと類比的に理解できるように思われる。そうだとすれば、概念工学の倫理的妥当性を検討する際には、ナッジの倫理的妥当性をめぐる論争が手がかかりとなるだろう。

ナッジに対しては、対象者の熟慮を介さずに行動を変容させることから、一種の操作なのではないかという批判がしばしばなされる。このような批判に対して、ナッジの支持者は、多くのナッジは対象者がその存在を認識できるという意味で透明性があり、また、オプトアウト可能であるということから、ナッジはパターンリスティックではあるものの、個人の自律を侵害するものではないと応答している。

これに対して、概念工学の透明性は高いが、その影響力に対してオプトアウトが可能であるかどうかは明らかでない。また、概念はさまざまな場面で用いられるものであり、ある概念を導入することの影響は一般的である。さらに、概念変化がもたらす帰結の予測や制御も困難である。これらの理由から、概念工学はナッジよりも倫理的問題が大きい手法と言えるかもしれない。

他方で、より一般的な観点に立てば、概念工学とナッジは、いずれも人間の意思決定や行動を変容させる手法の一種と考えることができる。そのような手法には、能力増強、ブースティング、法による強制など、概念工学やナッジのほかにもさまざまなものがある。これらは、意思決定から行動に至る一連の過程のどの部分に、どのような方法で介入するかという点で異なっている。このような視点から概念工学を捉えることも、その意義を評価する上では重要だろう。